

象嵌技術と謎の一文字「れん」をめぐって

工芸文化研究所 鈴木 勉

第一章 庚寅銘大刀の釈文と訓読の問題について

第二章 象嵌技術と謎の一文字「凍」と「練」をめぐって

1. 「凍」と「練」を論ずるための「中平銘鉄刀」
 - (1) 文字の結体
 - (2) 文字の章法（配置）
 - (3) 銘文の内容
 - (4) 蹴り彫り象嵌の蹴りピッチの違い
 - (5) 「中平銘鉄刀」の製作地と製作時期
 - (6) 「中平銘鉄刀」と靈帝信仰
2. 「練」「凍」「鍊」「煉」の原義とその後
 - (1) 『説文解字』（後漢）の頃とそれ以前の「凍」
 - (2) 後漢の鉄刀銘の「凍」
 - (3) 後漢から三国時代の鏡銘の「凍」
 - a. 「幽凍三商」
 - b. 「百凍青銅」
 - (4) 鑄造銅器に「凍」字が使われるのは
 - (5) 『塩鉄論』に見える文人と官僚の技術の知識
3. 古代中国の「凍」と極東アジアの「練」
 - (1) 百済の「百練」
 - (2) 日本列島の「百練」「八十練」
 - (3) 古代中国の「凍」と日本列島の「練」

第三章 「練」か「凍」か？

1. 保存科学と金石学の共同作業
2. 「庚寅銘大刀」の訓読と571年製作説について
3. 文字の技術史（筆文字に似せて彫る文化と技術）
 - (1) 日本列島の線彫り刻銘技術
 - (2) 朝鮮半島の刻銘技術
 - (3) 「庚寅銘大刀」の刻銘技術
4. 「庚寅銘大刀」の解釈と製作年

第一章 庚寅銘大刀の釈文と訓読の問題について

〈釈文〉大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果凍（or 練）

この銘文の釈文はどうか、文章をどこで切って読むか、です。金石学では、釈文が一番大切です。その跡でどう読むかということです。

a. 坂上康俊氏説¹・・・次の様な文章の切り方を提案しています。

〈釈文〉「大歳庚寅正月六日庚寅、日時作刀凡十二果凍（練）」

また、東野氏説を批判して、十二は刀の本数ではなく、用例の通り鍛錬の回数だと言っています。

- 練に連なる数字は鉄素材を鍛えた回数を指すとみられること
- 十二は一種の特別な数字であること
- 十二は多いことを意味する数字であること

b. 東野治之氏説²・・・文章の中央近くの日時の間を文章の切れ目としています。

〈釈文〉「大歳庚寅正月六日庚寅日、時作刀凡十二果凍（練）」

坂上氏も東野氏も二つ目の「庚寅」を正月六日の日につなげたのです。ですから、年と正月六日がともに「庚寅」にあたる年を暦から探して571年だけだとしたのです。

「庚寅」の年は、60年に1回ずつ、511年、571年、631年、691年、751年がそれに該当します。

c. 考古学では、遺物、遺跡の状態からその埋葬時期や追葬時期などを推定しますので、かなり幅のある話になります。ですから、他の確かな研究に寄りかかりがちです。注意が必要な点といえます。

大刀の製作年代に関する考古学的評価については、豊島直博氏が刀装具の検討から6世紀第IV四半期としています³。しかし、報告を精読してみると刀装具の中で唯一年代感を与えているのは環付足金具（図1）だけで、当の環付足金具は「庚寅銘大刀」には附属していないのです。附属していないものを年代判定の根拠にできるのでしょうか。豊島氏は鞆口金具の切取りの形状（図2）が半円形だから「古い環付足金具が付く可能性が高い」としていますが、この判定は、不確定要素が余りにも多いと感じます。坂上氏らの571年説に寄りかかっているようにも思えます。

ここで銘文に戻りましょう。問題は、坂上氏、東野氏の説、つまり「正月六日庚寅」を一文とする説に



図1 環付足金具（豊島論文より） 図2 鞆口金具の切取りの形状（豊島論文より）

¹ 坂上康俊 2018「庚寅年銘鉄刀製作の背景」『元岡・桑原遺跡群 30 元岡古墳群 G-6号墳・庚寅銘大刀の考察 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』福岡市教育委員会

² 東野治之 2018「元岡 G-6号墳出土大刀の銘文とその書風」『元岡・桑原遺跡群 30 元岡古墳群 G-6号墳・庚寅銘大刀の考察 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』福岡市教育委員会

³ 豊島直博 2018「3 庚寅銘大刀の考古学的位置付け」『元岡・桑原遺跡群 30 元岡古墳群 G-6号墳・庚寅銘大刀の考察 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』福岡市教育委員会

従うと、その後ろの文章が読めなくなってしまうのです。坂上氏は、そのことに言及していませんが、東野氏は、何とかして後ろの文章を読もうとします。

東野氏の訓読「大歳庚寅正月六日庚寅の日、時に刀を作ること凡て十二、果して凍（きた）う。」

この読みには無理があります。例えば「十二果練」ですが「十二本作る」などと読む銘文は坂上氏も指摘するように用例がありませんし、「果たして」という現代日本語の読みを当てることも疑問です。これまでの中国と日本の論考では「鍛錬の回数」として理解されています（この問題は大きな問題ですので後で詳述します）。つまり、東野氏は「用例のない新解釈」で読もうとしているのです。それは金石学では通用しません。

表1 「月日・干支」となる金石文の例

金石文の名称と器物名	西暦
赤烏元年五月廿五日丙午造作明鏡百凍（赤烏元年銘画文帝神獸鏡）	238年
赤烏七年口月廿口日丙午時加日中造作明鏡百凍幽漳（赤烏七年銘画文帝神獸鏡）	244年
咸寧五年三月六日己丑造（咸寧五年銘磚）	279年
元康五年八月十八日乙酉造（元康五年銘磚）	295年
泰口四年十一月十六日丙午正陽造百練口七支刀（七支刀）	369年
癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩到乙巳年八月癸酉朔十二日甲申安厝（百濟武寧王誌石）	524年
己酉年十月癸未朔十二日甲午改口還墓立（百濟武寧王妃誌石）	529年
阿須迦天皇之未歲次辛丑十二月三日庚寅故戊辰年十二月殯葬（船氏王後墓誌銅版）	668年
戊戌年四月十三日壬寅取糟屋評造（戊戌年銘京都妙心寺鐘）	698年
以和銅元年歲次戊申十一月廿七日己酉成（下道園勝園依母夫人銅製藏骨器）	708年
和銅三年十一月十三日己未（伊福吉部徳足比売墓誌銅製藏骨器）	710年
和銅四年三月九日甲寅（多胡碑）	711年
養老五年歲次辛酉冬十二月癸酉朔十三日乙酉葬（元明天皇陵碑）	721年
養老七年十二月十五日乙巳（大安麻侶墓誌）	723年
天平勝宝三年歲次辛卯四月廿四日丙子從二位竹野王（龍福寺五層石塔）	751年
天平宝字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳春秋七十有五（石川年足墓誌）	762年
十二月乙巳朔壬申葬于撰津國（石川年足墓誌）	762年
宝龜七年歲次丙辰十一月乙卯朔廿八日壬午葬（高屋枚人墓誌）	776年

そこで私は古代の金石文について調べ直しました。「大歳庚寅正月六日庚寅」のように「月日・干支」となる金石文を探したところ、表1のようにいくつか見つかりました。ところが、日に続く干支がある金石文の場合、その干支の次に来る文は、全て別の文章となっています。つまり、日に続く「干支」が文の切れ目となるのです。用例がない例を自分で作ってしまっただけでは学問になりません。そうしたことから、東野案「庚寅日、時、、、」と読むことはできません。これも東野流「用例のない新解釈」なのです。ですから、①「正月六日庚寅、」と切るか、あるいは②「正月六日、庚寅日時作刀、、、」と切るかということになります。

①の場合、後ろの文章が読めないのです。つまり、「日時作刀凡十二果凍」が読めません。ですから東野氏は「正月六日庚寅日、時に、、、」と読んだのです。彼は、用例が無いことまでは調べていないのでしょう。金石学で「用例がない」ことは「突飛な解釈」です。

私は、「正月六日」と「庚寅日時、、、」を別の文と解釈します。これによって、坂上氏の説「571年製作説」の根拠がなくなります。坂上氏は、庚寅の年であって、正月六日が庚寅の日である年を元嘉暦で探して571年としたのです。文章の切れ目次第で「元嘉暦」にこだわる必要がなくなります。そうすると、庚寅の年である511年、571年、631年、691年、751年が製作年の候補となります。

第二章 象嵌技術と謎の一字「凍」と「練」をめぐって

1. 「凍」と「練」を論ずるための「中平銘鉄刀」

(1) 文字の結体

奈良県東大寺山古墳（5世紀前半）から出土した「中平銘鉄刀」の文字の結体は、後漢の文字にはありません。その文字は「鏡銘体」と呼ぶに相応しいほど、3, 4, 5世紀の神獸鏡の銘文と酷似しています⁴（図3、図4）。「中平銘鉄刀」の文字を、後漢代から三国までの碑文と鏡銘の文字の縦横の寸法比（横寸法に対する縦寸法の割合）を比較してみました（表2）。

これを見ると、「中平銘鉄刀」の文字が縦長であることがわかり、後漢代の標準的な隸書や後漢鏡銘とは大きな違いが認められます。三国鏡銘の文字とよく似た縦・横の寸法比であることが分かります。

表2 字の縦横の寸法比（横寸法に対する縦寸法の割合）

文字	漢碑	中平銘鉄刀	後漢鏡銘	三国鏡銘
五	46.5	84.6	—	84.6
清	—	175.0	—	185.7
作	62.8	125.0	88.2	98.2
練	82.6	121.7	166.7	144.6
剛	85.4	150.0	—	125.4

(2) 文字の章法（配置）

文字の章法（配置）も漢代は、石碑では均等な文字ピッチによって配置され（図5）、象嵌銘では蜀地方の「横画等ピッチ法」で配置される（図6）のに対し、「中平銘鉄刀」では銘文の末尾においてそれまでとは全く異なる間隔になります（図7）。これは、漢代の銘文に相応しくありません。最後に余白が少なくなると文字が詰められる点など、文字配置の不均等さは神獸鏡銘の配置と似ています（図8、9）。

三角縁神獸鏡の「系譜」はもちろん中国にあります。つまり、中国の鏡作工人が日本列島に渡ってきて、日本列島で工人集団を形成するかまたは日本列島の鑄造工人集団に取り込まれて、日本列島の埋葬古墳の近くで出吹きされたことはすでに私が明らかにしています⁵。

(3) 銘文の内容

「中平銘鉄刀」の銘文は、「重列神獸鏡」（261年）の銘文とよく似ています。

「重列神獸鏡」が

「永安四年大歳己巳五月十五日庚午、造作明鏡、幽凍三商、上応列宿、下辟不祥、……」

「中平銘鉄刀」が

「中平□年五月丙午、造作文刀、百練清剛、上應星宿、下辟不祥」

となり、「中平銘鉄刀」が「重列神獸鏡」などの銘文を元にして作られたことがわかります。

(4) 蹴り彫り象嵌の蹴りピッチの違い

蹴り彫り象嵌の技術は、中国中原や蜀の製品に精緻な蹴り彫り象嵌があります（図10）が、「中平銘鉄刀」はそれとは全く異なり、蹴りピッチも極端に粗くなり（図11）、双方の時間的空間的距離が大きいと考えられるのです。粗い蹴りピッチの蹴り彫り象嵌製品は、朝鮮半島・日本列島からの象嵌遺物で確認されています⁶。

⁴ 鈴木勉 2013「中平銘鉄刀と「鏡銘体」」『金壺集—石田肇教授退休記念金石書学論叢』

⁵ 鈴木勉 2016『三角縁神獸鏡・同范（型）鏡論の向こうに』雄山閣

⁶ 鈴木勉・金跳咏 2017「日本古代象嵌技術の起源と展開」『文化財と技術』第8号、百済には蹴り彫り象嵌技法の象嵌遺物が出土している。



図5 文字が均等に配置された曹全碑（後漢）



図6 横画等ピッチ法で配置された象嵌銘
（左から 五十凍大刀、光和七年銘象嵌刀子、廣漢銘書刀）

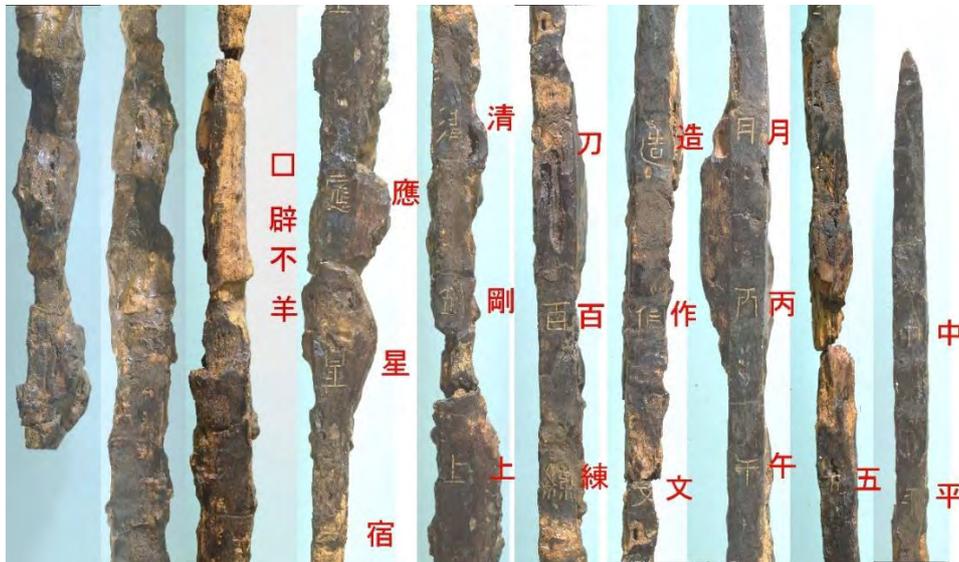


図7 「中平銘鉄刀」の銘文配置



図8 黒塚31号鏡の銘文

図9 黒塚19号鏡の銘文



図10 卅凍鉄刀蹴り彫り象嵌

図11 中平銘鉄刀蹴り彫り象嵌

(5) 「中平銘鉄刀」の製作地と製作時期

以上のことから「中平銘鉄刀」は、日本列島内で3～5世紀に製作されたと考えられます。

金関恕氏は、「年号の書き誤りを認めるならば金石学は成立しない」と述べています⁷が、それは誤りです。そもそも金石学は「紀年」を疑うところから始まる学問です。身近な問題としては、法隆寺再建非再建問題は、その「紀年」に問題があるところから生じています。「紀年」をそのまま信用して、本来考古学が扱うべき遺物や文字のかたちまでも無視してはいけません。かつて中国の孫机氏が中平銘鉄刀を3世紀後半の日本列島での製作と推定しました⁸。ところが日本の考古学界は、大刀や文字に対する研究を怠り、金関説を暗黙のうちに支持し、孫氏の説を無視することとなりました。私はこの説の一部を強く支持します。大刀や文字に対す考古学的な再研究を強く希望します⁹。

(6) 「中平銘鉄刀」と霊帝信仰

では、なぜ後漢の年号が3, 4世紀の日本列島で象嵌されたかという問題が残ります。これについては、古代日本列島において霊帝信仰が存在した可能性を福井卓造氏が詳しく述べています¹⁰。

現代では、霊帝の時代というのは政治、社会が乱れ、後漢帝国の崩壊につながったよくない時代ということになっている。しかし、近年霊帝時代の評価に変化が現れてきており、「霊帝朝とは、そのような漢王朝としての志の高い時代ではなかったか、残念ながら政治的には霊帝は改革途上にして倒れることとなったが、少なくとも儒学や書の乱れを正し、後世にお手本を残したという文化・芸術的においては、霊帝は漢王朝中興の祖たらんとした名君として崇敬に値するといえるのではなかろうか。してみれば、後世の人が霊帝の時代への憧憬の念から漢王朝最終末期の中平の銘を鉄刀に刻するという事、十分ありうる事といえるのではないか。

また福井氏は『新撰姓氏録』などを繙き、「霊帝及びその子孫とされる阿知使主に直接関連する記述」を抜き出しています。例えば、二十三の氏族が「後漢霊帝三世孫阿智使主之後也」「後漢霊帝八世孫孝日應之後也」「出自後漢霊帝苗裔奈率張安力也」などとあることを報告し、『続日本紀』延暦四年六月の坂上阿田村麻呂等が宿禰姓を賜りたいがために提出した次の上表文を紹介しつつ述べています。

『臣等は本是れ後漢の霊帝の曾孫阿智王の後なり。』

つまり古代日本においては、阿知使主の功績の偉大さ、そしてその阿知使主が後漢霊帝の曾孫とされたことから、中国の数多の皇帝の中においても、とりわけ後漢霊帝を信奉する一大勢力があったのではなかろうか。

これまで「中平銘鉄刀」は、「中平」の銘文から後漢の中平年間に作られたものと考えられてきました。「伝世」の語は実に便利な語で、すべてのことを可能にしてしまいます。十分注意が必要です。

今一つ、現代のことですが付け加えると、森浩一氏の著書¹¹につぎのようにあります。

会稽東冶の東とする説明があることは東シナ海の横断航路があったことを示唆している。東の到達点の一つが肥後の天草諸島である。天草の豪族の中には後漢の霊帝の子孫という家伝を持った者も

⁷ 金関恕 2010 「中平銘大刀の銘文小考 —文刀について—」『東大寺山古墳の研究』

⁸ 孫机 1996 「百煉鋼刀与相関之問題」『中国経火』遼寧教育出版社

⁹ 鈴木勉 2008 「百練鉄刀の使命 —東大寺山古墳出土中平銘鉄刀論—」『論叢 文化財と技術 1 百練鉄刀とものづくり』雄山閣、

¹⁰ 福井卓造 2013 「東大寺山古墳出土中平銘鉄刀における追刻の可能性」『金壺集—石田肇教授退休記念金石学論叢』

¹¹ 森浩一 2010 『倭人伝を読みなおす』筑摩書房、147 頁

いた。

これを東シナ海の横断航路と結びつけることはもう少し慎重な検討が必要ですが、古代から現代に至るまで、靈帝信仰が存在していることを確認できます。3～5 世紀の間に、靈帝信仰に根ざす意識があって「中平」の銘を刻んだと考えることができるのではないのでしょうか。

古代中国には「いとへん」の「練」字を使った銘文が「中平銘鉄刀」以外になく、中国では後漢代には「凍」の字、三国時代に至って「鍊」の字が使われるようになったのです。

以上のことから、「中平銘鉄刀」は、雷帝信仰が存在していた日本列島で3～5 世紀に製作された可能性が高いと言えます。つまり、「練」字は、中国漢代・三国時代の金属器の銘文には使われておらず、「鍛鍊」を意味する鍛造技術を表す語として3～5 世紀以降の朝鮮半島や日本列島で新たに生まれ出たのです。

2. 「練」「凍」「鍊」「煉」の原義とその後

「練」「凍」「鍊」「煉」の文字は古代中国においてどのように使われていたのでしょうか。古代の朝鮮半島や日本列島とは使われ方が異なるかもしれません。なんとと言っても中国と朝鮮半島と日本列島では使われた「鉄」に大きな違いがあったのです。

(1) 『説文解字』（後漢）の頃とそれ以前の「凍」

「練」「凍」「鍊」「煉」などの文字はどのように使われたのでしょうか。後漢のAD100 年頃成立したと言われる許慎の『説文解字』には次のように解説されています。

「練、凍繒也从糸東聲」

（練は繒（絹糸）を凍する（煮て柔らかにする）なり、糸に从い、東の聲）

「凍、簡（さんずい）也从水東聲」

「簡（さんずいがつく）、潘也从水簡聲」

（簡（さんずい）、潘なり、水に从い、閒（たけかんむり）の聲）

「浙、汰米也、从水析聲」（浙、米を汰う也、水に从い、析の聲）

「鍊、冶金也从金東聲」（鍊、金を冶（と）かすなり、金に从い東の聲）

「煉、鑠冶金也从火東聲」（煉、金を鑠冶（とかす）なり、火に从い東の聲）

「練」「凍」「鍊」「煉」の四文字はどれも形聲字で、「東」の聲で共通、つまり発音が同じです。形聲字とは、主な意味を表す「意符」と発音を表す「音符」の組み合わせで作られた文字を言います。漢字全体の70～80%が形聲字だと言われています。『説文解字』の説明から「東」の聲が意味するところの概念が「液体の中にさらす」であることが分かります。さらに、「練」や「凍」には「とぐ」「精製する」などの意が含まれています。つまり「煉」や「鍊」の中に「とかしてきれいにする」意味が含まれていたのです。しかし、それ以前のことを文献で遡ってみます。

前漢武帝の頃（BC156～BC87）に成立したとされる『周禮冬官考工記』には「冂氏凍絲，以澆水漚其絲，七日，去地尺，暴之。晝暴諸日，夜宿諸井，七日七夜，是謂水澆」とあり、当時は「凍」は、絹糸を長い時間水にさらして精製することを言っていたようです。加藤常賢氏は「凍」の原義を「バラバラにして水

につける」としています¹²。「凍」は糸の精製を意味していたのです。

また、「練」について、加藤常賢氏は『周禮天官・染人』や『淮南子・説林訓』などを引いて「糸を煮て柔軟にして光沢を出す意である。それを引伸して、精熟を称して「練」と言うに至った、としています。

「練」も糸の精製を意味していたのです。

『説文解字』に「凍」も「練」も糸を水に曝して精製するものと解説されていることからすれば、後漢に入っても前漢時代の「凍」と「練」の原義が通用していたのです。

しかし、「練」「凍」「鍊」「煉」などの用例を搜すと下表のように、前漢末のころから始まって後漢の中頃まで、鑄造銅器の銘文に「凍」字ばかりが使われていたことがわかります。「凍」字は、銅合金の溶解工程を含んだ精製の意味、つまり「とかしてきれいにする」意味で使われていました。後の日本列島の「鍛鍊」は鉄素材の精製を意味しますが、銅の鑄造では「鍛練」の工程はありません。

表3 <紀元前の紀年と『凍』を含む銘を持つ鑄造銅器>

①	「上林十凍銅鼎、容一斗、并重十斤、陽朔元年（BC24）六月庚辰、工夏博造、四百合、第一百一十七」	漢陽朔鼎
②	「陽朔四年（BC21）考工考工為湯官卅凍銅鐘、容五斗重廿三斤、...」	陽朔四年鐘
③	「乘輿十凍銅鼎、容二斗、并重十八斤、永始三年（BC14）、考工工蒲造、...」	乘輿十凍銅鼎
④	「乘輿十凍銅鼎、容一斗、并重十一斤三兩。元延三年（BC10）、供工工彊造、...」	漢元延鼎
⑤	「綏和元年（BC8年）供王昌為湯官造卅鍊銅黃塗壺容二斗重十二斤八兩塗工乳御級掾臨主守右丞同守令寶省」	漢綏和黃塗壺
⑥	「建武卅二年（AD56）一月虎賁官治十凍銅口口鐵百一十枚工李嚴造、...」	京兆官弩鐵
⑦	「建初元年（AD76）楊吳造、四凍八石」	建初元年鐵
⑧	「永元六年（AD94）閏月一日、十凍牢尉斗宜衣、重三斤、直四百、保二親、大富利、宜子孫」	永元熨斗

(2) 後漢の鉄刀銘の「凍」

管見では、鉄刀に施された銘文として現在に伝えられるものは表4のとおりです。「凍」は鍛練の意味で使われているのでしょうか。疑問が消えません。

表4 後漢代の刀剣などへの象嵌銘

①	江蘇省徐州市銅山縣駝竜山出土建初二年（AD77）金錯鉄劍	「建初二年蜀郡西工官王惜造五十凍口口口孫劍口」（蹴り彫り象嵌）
②	山東省蒼山縣出土永初六年（AD112）金錯鉄刀	「永初六年五月丙午造卅凍大刀吉羊宜子孫」（蹴り彫り象嵌）
③	永元十口口年（AD99-105）銘廣口郡卅凍書刀	「永元十口口廣口郡工官卅凍書刀工馮武（下漫滅）」
④	永元十六年（AD104）銘廣漢郡卅凍書刀	「永元十六年廣漢郡工官卅凍口口口口口口口史成長荆守丞憲主」
⑤	「漢元嘉刀」銘刀（AD153）	「元嘉三年五月丙午日造此口官刀長四尺二口口口宜侯王大吉羊」
⑥	四川省天迴山3号崖墓光和七年（AD184）銘十凍書刀	「光和七年廣漢工官十凍口口服者尊長保子孫宜侯王家富」
⑦	廣漢郡口口口卅凍書刀	「（上缺）廣漢口口口卅口口口口秋造護工卒史克長不丞奉主」
⑧	漢廣漢金馬書刀（銘文存七字）	「（上訣）廣漢（中訣）史克長口口奉主」
⑨	漢廣漢金馬書刀（銘文可読者十一字）	「（上訣）年廣漢郡工官（中訣）成長口口丞憲主」
⑩	後漢李元金馬書刀	「巧冶練剛金馬託形、黃文錯鏤兼勒工名」

(3) 後漢から三国時代の鏡銘の「凍」

¹² 加藤常賢 1970『漢字の起源』角川書店

a. 「幽凍三商」

後漢・三国時代、「凍」字が最も多く使われているのは鏡銘です。林裕己氏¹³によると、後漢の鏡で「凍」字が用いられる場合は、多くが「幽凍」と使われています。紀年銘鏡では元興元年(AD105)銘環状乳三神三獸鏡の「元興元年五月丙午日天大赦広漢造作尚方明鏡幽凍三商、、、」があります。その後は、「幽凍三商」あるいは「幽凍宮商」と使われる部位に「合凍白黄」、「幽凍白同」、「幽宮東商」、「幽凍黄白」などと記されることもあります。この時代、複数の金属を上手に合金する技術を「幽凍」「合凍」などと表現しているのです。この「凍」は後漢から前漢にかかるころの鑄造銅器銘の「凍」と同じ使い方です。合金技術と撰文者が近いところにいたのです。鏡の鑄造では金属を「溶かして」合金にし、鑄型に流し込みます。

b. 「百凍青銅」

「百凍」の語の初出は呉の黄武元年(AD222年)銘対置式神獸鏡で、「百凍明竟」とありますから「百凍の銅を使った明らかな鏡」の意味です。その後、建武の年号(AD304)銘を持つ対置式神獸鏡に至るまで、数多くの鏡銘に使われています。林氏によれば、「百凍」の銘を持つ鏡は総数で54面あります。

多くは「造作明竟 百凍清同」、「造作明竟 百凍青銅」などと用いられます。後漢時代後半の頃に「幽凍三商」、「合凍白黄」、「幽凍白同」などと用いられたのとは様子が変わっています。「幽凍」は複数の金属を溶かし合わせるという作業を示すのに対し、「百凍」は「百凍の清らかな(精製された)銅」という材料そのものへの評価を示しています。後漢時代の後半は、撰文者の目が銅合金製作の場に向けられていたものが、三国時代になると、素性の良い銅材料を意味する「百凍」の語が使われたようです。わずか100年の間に、銅鏡の原材料製作(合金作業)と鑄造工房の距離が離れてしまった状況が推定されます。漢代以来、粗悪銅銭の流通があったことは有名な話です。良い銅材料の入手は当時の鑄造技術者にとって大切な問題であったことがうかがえます。鏡銘に「百凍清銅」と記述するようになったのは、そうした社会背景の変化があったと思われる。つまり「百凍清銅」とは、巷間に流通している粗悪な同素材との区別を明瞭にする句です。三国時代には、由緒の正しい鏡用銅合金材料が広く流通していた状況が推測でき、粗悪品との差別化が進み、ブランド化していた可能性もあるのではないのでしょうか。

(4) 鑄造銅器に「凍」字が使われるのは

鏡など鑄造銅器に「凍」字が用いられていることに現代日本人であれば疑問を持つのではないのでしょうか。はがね(鉄)の製錬の工程には、①「鍛錬」つまりはがねを赤熱させて金槌で叩き、時には折り返して層状のはがねとする精製工程と、②銑鉄を溶かして精製する工程の二つがあるのですが、銅の製錬には、②銅を溶かして精製するだけで、①「鍛錬」の工程はないのです。ましてや鑄造銅器では「鍛錬」に類する工程は全く存在しないのです。ではなぜそこに「凍」字が使われているのでしょうか。

前漢から後漢のころの鑄造銅器銘や後漢三国時代の鏡銘の「凍」字は銅を「溶かして精製する」ことの意味で使われてきました。では同じ後漢時代の刀剣への象嵌銘に「凍」字が使われているのはどうしてなのでしょう。二つの可能性が考えられます。一つは「全く異なる工程を敢えて同じ「凍」字で表現した」、二つ目は「全く同じ工程だから「凍」字で表現した」。どちらでしょう。

全く異なる工程を同じ「凍」字で表現するのは中国の文字文化から考えてあり得ないと思うのです。私は、表現したい「工程」が全く同じ内容の「工程」であったからこそ同じ「凍」字を用いたと考えるべきだと思います。銅器の銘では「溶かして精製する」意味で「凍」を使いました。ですから、鍛造鉄器である象嵌銘鉄刀剣の銘の「凍」も「溶かして精製する」意味で使ったと考えられます。鑄鉄の精製工程なら

¹³ 林裕己 2007 「漢・三国・六朝紀年鏡銘集成 05」『古文化談叢』56

ば「溶かして精製する」工程があります。中国では鉄素材は「白銑」として一旦製鉄されます。「白銑」は鑄鉄の一種でとても硬くて、高温に加熱する脱炭工程を経て硬さとじん性を併せ持つ鑄造鉄器や刀剣の材料となる鍛鉄に変わります。その白銑（鑄鉄）の不純物を除去したり純度を上げるために「溶かして精製する」のです。つまり、刀剣の象嵌銘に「七凍」や「三十凍」や「五十凍」と「凍」字が使われているのは「溶かして精製した」鉄素材を使ったことを表しているのです。「鍛練」という作業を意味しているわけではありません。

こうした製作技術上の言葉を、当時の撰文する人が知っていたのだろうか、という疑問があると思います。現代の日本であればその疑問は当然のことです。現代の学者や官僚で、鉄の精錬と銅の精錬は工程が全く異なっていることを知る人がどれほどいるでしょう。現代の日本であれば、全く異なる工程を同じ文字で表現してしまうこともあるかもしれません。ところが、古代中国では、当時の賢良（文人）も御史大夫（官僚）も技術のことを知り尽くしていたのです。その実例をご紹介します。

(5) 『塩鉄論』に見える賢良と御史大夫の技術の知識

『塩鉄論』は前漢代の塩と鉄の専売制に関する議論の記録です。鉄の専売制では、鉄や鉄器の生産から販売まですべてが国家の直接経営下に置かれました。つまり、専売制の目的は、それまで民が得ていた製造と販売の利益を国家が独占するところがありました。前漢武帝が専売制の利益を独占することによって、破綻した国家財政を救ったことはよく知られています。ところが専売制の改廃については、賢良（文人）と御史大夫（桑弘羊・官僚）によって大いに議論されました。その経過を詳細に記録したのが『塩鉄論』です。一部をご紹介します。

「鉄力は銷錬せず。堅柔は和せず。」

これは、塩鉄の専売制の継続を主張した御史大夫（桑弘羊）が、「鉄器の制作を民間に任せている」という前段があって、「うまく鉄の力を発揮させることができない。堅さと柔らかさがうまくなじまない。」と言っています。鉄は、堅いばかりではいけません。同時に柔軟性がないといけないのです。ここでいう「柔」とは、現代の「靱性」つまり「ねばり強さ」のことです。日本刀も農具も堅くて折れにくく欠けにくいものでなければなりません。つまり堅さと靱性という相反する性質を併せ持たないといけないのです。そうした技術的専門的なことが政治の場で議論されているわけです。

「剛柔和し、器物便なり」

これは、前の文章に続いて御史大夫（桑弘羊）が「剛柔、つまりかたいものと柔らかいもの、両方がうまくまじりあって、はじめて良い器物ができます」と言っています。

「今、県官鉄器を作るに、苦悪多く、用費省れず」

これは、塩鉄の専売制の廃止を主張する賢良（文人）達が、「(国営の) 県官（鉄官）が鉄器を作るようになって、悪い製品が多くなるばかりで、コストは一向に下がらない」といっているのです。

「今其の原（もと）を総べ、其の賈を壹にす。器に堅硬多く、善悪擇するところなし」

これは、賢良（文人）達が、「作るところを一カ所にし、価格も同じにすると、容器に固いものが多くなり、「買う人は選ぶことができない」といっています。つまり白銑製の固い容器はちょっと落としただけで割れてしまいますので、そういった割れやすい鑄鉄製品（白銑）がたくさん出まわっていて困るということを行っているのです。

以上のようなことが、専売制を継続しようとする御史大夫（桑弘羊）とそれに反対する賢良（文人）達

の両方から自説を裏付けるために鉄器の技術的なことが述べられているのです。堅さと韌性を調和させた良い鉄器を作ることが国の経済を左右することになるという点は、継続派も反対派も認めているわけです。それは、鉄の技術の神髄でして、現在に至ってもなお技術者たちの最重要なテーマの一つです。このテーマは、鉄に限らず技術に関わる普遍的課題なのです。こうした深い技術的な課題について、前漢の、それも技術者が言っているのではなくて、当時の政治家や文人達が議論していることは驚くべきことではないでしょうか。

以上のように古代中国では、撰文をする知識人も技術の知識を豊富に有していたのです。そのような彼らが異なる「工程」を同じ文字「煉」で表現することは考えられません。

3. 3～5世紀の百済と倭における『練』

(1) 百済の「百練」

七支刀銘の「造百練鉄七支刀」の部分は、「百練鉄」という良い品質の鉄素材を用いて七支刀を造った」と釈読できます。

(2) 日本列島の「百練」「八十練」

① 「中平銘鉄刀」(3～5世紀 日本列島)

「中平□年五月丙午、造作文刀、百練清剛、上應星宿、下辟不祥」(蹴り彫り象嵌)

良い品質の鉄素材が使われていることを銘文で言っています。

② 稲荷山鉄剣の「百練」(5世紀 日本列島)

「令作此百練利刀記吾奉事根源也」

此の百練鉄の利刀を作らしむ。吾が奉事の根源を記すなり

この「百練利刀」は一般には「幾度も練り鍛えあげたよく切れる刀」と理解されていますが、この解釈は近現代の刀鍛冶などの鍛造作業を念頭においたもので、製作時に「幾度も練り上げた」かのように考えています。「百練利刀」が名詞的に用いられていることが考慮されていません。ここは「作此百練利刀」であるから、作るに際して工人が幾度も練り上げたのではなく、「百練の鉄で作った利刀」と解釈すべきです。これも「百練」という「良い鉄素材で作った」利刀を意味しています。

③ 江田船山古墳銀象嵌銘鉄刀の「八十練」(5世紀末 日本列島)

江田船山古墳銀象嵌銘鉄刀には「八十練」の銘があります。この銘文は三段に分けて理解します¹⁴。

「治天下獲□□□鹵大王世奉事典曹人名无利亘」

(治天下獲□□□鹵大王の世、事へ奉る典曹人、名は無利亘)

「八月中用大□釜并四尺廷刀八十練□十摺三ホ上好□刀」

(八月中、大鉄釜ならびに四尺の廷刀を用いて八十練・六十摺す。三つ等(ホ)しき上好の□刀。)

「服此刀者長寿子孫汪〃得其恩也不失其所統作刀者名伊太加書者張安也」

(此の刀を服する者は、長寿にして子孫は汪〃、其の恩を得る也。其の統ぶるところを失わず。作刀者の名は伊太加、書者は張安なり。)

これは中国から伝来した「百練」という良い鉄素材より少しだけ品質的に劣ると自ら評価した「八十練」の語を用いて自身で作った鉄素材を評した銘文だと推定されます。

¹⁴ 鈴木勉・福井卓造 2002 「江田船山古墳出土大刀銀象嵌銘「三寸」と古墳時代中期の鉄の加工技術<付説：法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘の「尺寸」と「ろう製原型鑄造法」について>」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第25冊

(3) 古代中国の「涑」と日本列島の「練」

以上述べてきたように、古代中国では「溶かして精製する」意味で「涑」字を用いていました。ところが、三国時代に入って良い銅素材であることを意味する「百涑」と変わったのです。ところが、この「百涑」は鍛練を意味していません。朝鮮半島を経て日本列島にたどり着いた鉄素材にも「百練」の文字を付与して使うようになり、ここで、ついにははがねの精製工程の一つである「鍛練」の語へと変化させた経過が見えてきました。もとより、「涑」の文字には「鍛練」の意味はなく、「溶かして精製する」意味だったのです。

古代には古代の文字の意味があり、古代中国と日本列島では全く異なる意味で文字が使われていたことに注意しなければなりません。現代語の解釈から古代の言葉を類推することには慎重でなければなりません。

第三章 「練」か「涑」か？

1. 保存科学と金石学の共同作業

ここでは「涑」字の偏が「さんずい」か「いとへん」かということが問題です。旁は「東」と「東」は通用していますから「東」と理解しておきます。

私の金石学は、古代の工人が見ていた景色を再現することから始めますから「象嵌」では、「溝を彫ったとき」に工人は文字を見えています。つまり、金を嵌める前の溝は工人の目にはどう写っていたか、ということなのです。

私は、「さんずい（便宜上）」の三画目の溝（図 12）がどうだったのか、が問題だと考えました。つまり、復元した「涑」字では、「さんずい」の三画目と「東」字の左はらいが重なってしまっている可能性があるのではないか、ということです。この場合「溝の深さ」が重要な釈文作業の決め手となります。



図 12 「庚寅銘大刀」の「涑」字

例えば、石碑の文字の場合、その溝が「キズ」か「文字線」かを見分けます。通常の文字の溝は、一定のかたちと深さを持っています。しかし、「キズ」の場合は、溝のかたちも深さも文字線とは異なる可能性が高いのです。その一画が「キズ」か「文字線」かで、釈文の文字は劇的に変わってしまうことがあります。

象嵌の場合は、より顕著に表れます。私はかつて仲間と一緒に七支刀を復元しました。書物では実物の七支刀をよく観察して、忠実な「釈文」を提供しました¹⁵。従来の石碑など陰刻の金石学では釈文作業というと、文字線とおぼしき溝に斜め上から光を当てて、そこにできる光の影で文字線を読み取る作業が中心でした。しかしこれでは黒い影を観察していることになって、「キズ」か「文字線」かという区別がつかないのです。浅い溝も文字線と判断してしまうこともよくありました。

江田船山銀象嵌銘では、「摺」字の釈文で東野氏は「君」字の第一画目の縦線のはっきりした文字線を見落としてしまい「振」と釈文してしまいました。また、「ホ」字の線画の見落としもし

¹⁵ 鈴木勉・河内國平 2006 『復元七支刀—古代東アジアの鉄・象嵌・文字—』 雄山閣

てしまい、「寸」字としてしまいました。どちらも「象嵌の溝」を見落としたのです。それぞれの判定の基準は、溝のかたちと深さから文字線か傷なのか腐食なのか、を判断することにあります。「拵」字の場合、象嵌の金銀線が外れた跡が明瞭に残っておりこれを見落としてはいけません、「ホ」字の場合は、腐食によって溝とおぼしき深さまで凹みを作っています。

象嵌の文字線の溝のかたちや深さが永い期間土の中であって大きく変わってしまうことが西山氏の報告にあります¹⁶。これも新しい金石学には大切な情報でしょう。

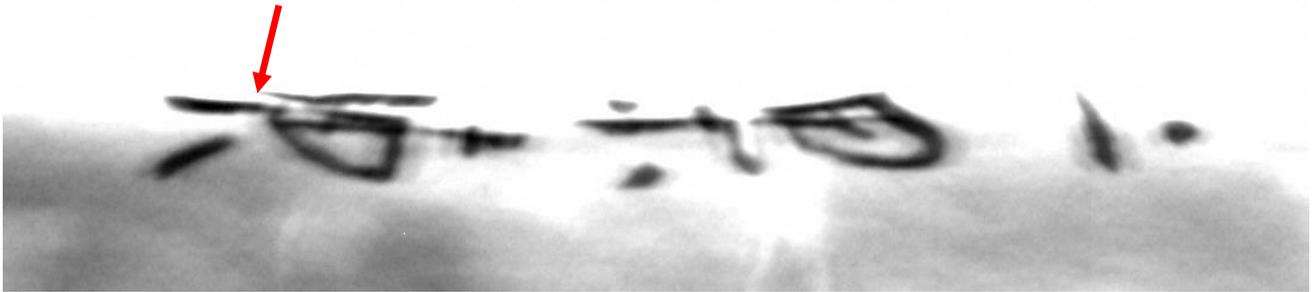


図13 「凍」字のさんずいの三画目と「練」字の左はらい（文字線の深さが異なる）

象嵌の文字線の溝のかたちと深さは、嵌まっていた金銀の線のかたちと太さとなって残ります。そこで私は、福岡市埋蔵文化財センターの比佐さんと松園さんの力をお借りして象嵌線の金線の太さを測定したいと考えました。比佐さんと松園さんはいろいろと工夫してくださいました。その作業は、重要文化財指定のために庚寅銘大刀がセンターを離れる一日前のことでした。その結果得られた画像がこの一枚です（図13）。

「練」字の左はらいの横方向から（刀身の右下から）のX線写真です。一本の文字線に見える金線の深さに違いが認められます。これは「練」字の左はらいの溝の深さと「さんずい」の第三画の溝の深さに違いがあったものが、金線を嵌める段階で二本の線が合体してしまったものだという推定が成り立ちます。そうなるとこの「凍」字は「練」ではなくて「凍」で良いのだということになるのではないのでしょうか。比佐さんと松園さんの執念とも言える仕事です。

これにはもう一つ別の判断要素がありますので、それをご紹介します。庚寅銘大刀には日本列島人や朝鮮半島人では理解できない文字が使われているのです。

〈釈文〉大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果凍（練）

それは「果」字です。

「果」は形声字の「慄」または「斨」の意符の省略とみます。いずれも「クア」の音符で近似した意味を示します。「慄」は「慄敢＝果敢」と同義。「斨」は「よく打つ」「たたく」の意ですが、ここで「打つ」「たたく」の意で用いるとすると「斨」は「凍」と同じ意味になってしまい、「斨凍」という熟語にはならないのです。つまり、「よく叩き、（さらに）よく鍛凍す」とは読めません。従って「果」は「慄敢＝果敢」の「慄」で「形声字の意符の省略」と判断されます。つまり現代語では「よく」で、「果凍」は「慄凍」で「よく精製す」の意となります。「形声字の意符の省略」は、漢文が母国語ではない朝鮮半島人や日本列島人では不可能な作業です。朝鮮半島人や日本列島人は、「慄」と「果」は全く別の意味と理解し

¹⁶ 西山要一 2018「元岡 G-6 号墳・庚寅銘大刀が解く古代日本の象嵌大刀」『元岡・桑原遺跡群 30 元岡古墳群 G-6 号墳・庚寅銘大刀の考察 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』福岡市教育委員会

ます。ところが中国の中原に生活する人の間では、「慄」と「栗」は発音は同じですからときに同じ意味で用います。「栗」字と「凍」字の使用から、庚寅銘大刀の銘文の撰文は中国系文人の手になるものと推定されるのです。ちなみに、さきたま稲荷山古墳金象嵌銘鉄剣は「形声字の意符の省略」は一文字も認められません。当時の日本列島人では漢文を作ることができないと考えられることから、朝鮮半島出身の人の手になる銘文だと判断できます。江田船山古墳銀象嵌銘鉄刀の文字には「形声字の意符の省略」は認められませんし、さらに古代朝鮮半島と日本列島でのみ通用していた「木」字すなわち「等」字があることから朝鮮半島出身の人の手になる銘文と考えられます。一方、七支刀銘は、随所に「形声字の意符の省略」が認められるとともに、説文解字の論ずるところに全ての文字が当てはまります。そのことから中国、それも許慎と同じ河北省出身の人の手になる銘文だと推定できるのです¹⁷。

以上のように、伝統的な学問である金石学も新しい科学の力を借りなければならない時代になってきました。もはや拓本や実物観察だけでは最も重要な「釈文」を正確に行うことができないのです。今回は比佐さんと松園さんの執着心がなければ成果を得ることはできなかったと思います。三次元測定、X線写真、X線CT画像などなど新しい科学装置が伝統的な金石学を根本から変えようとしています。考古学も手をこまねている訳にはいきません。今後は保存科学研究者との親密な協力関係が必要となることに疑いはありません。

2. 「庚寅銘大刀」の訓読と571年製作説について

ここで「庚寅銘大刀」の釈文案を提示します。

〈釈文〉「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二栗凍」

〈訓読〉「大歳庚寅の正月六日。庚寅の日時に刀を作るに凡(すべ)て十二栗(慄)凍。」

「大歳庚寅」の年は、511年、571年、631年、691年、751年とあります。正月六日が庚寅の日という理解では571年だけが該当しますが、これでは銘文を読むことができず、銘文として成り立ちません。そこで私は、「正月六日」と「庚寅」の間を文章の区切りとしました。「凡」は「すべて」「しめて」の意です。「庚寅の日時に刀を作るに凡(すべ)て十二栗凍。」と読みます。つまり、正月六日は庚寅の日ではないのです。となれば製作の年は、511年、571年、631年、691年、751年が候補に挙がってきます。

ここで「庚寅銘大刀」の考古学的な出土状況が大切な情報となります。発掘担当者の大塚氏と筆者とのメールのやりとりを御紹介します。

2月3日（筆者から大塚氏へ 抜粋）

大塚さま

昨年1月16日に、築造時期について、比佐さんから大塚さんの考え（結論だけ）をお聞きしました。大塚さんは「690年は難しい」と仰っていたとのことでした。以前、明治大学でお目に掛かったときに、「670年くらいまでは下げることが可能ではないか」と伺ったおぼろげな記憶があります。

細かい築造時期について、どのようにお考えでしょうか？

- 土器がその基準となっているのか？

¹⁷ 鈴木勉 2006 「3 形声字の省画について」 鈴木勉・河内國平編著『復元七支刀—古代東アジアの鉄・象嵌・文字—』雄山閣、173頁

- 刀剣が基準となっているのか？
- その他何を基準として考えておられるのか？

教えていただきたいのです。

その基準に対してプラスマイナス何年くらいの推定の幅があるのでしょうか？〈後略〉

2月4日 大塚さんからの返事（抜粋）

石室内からの出土土器は7世紀前半～中頃のもので、これらの土器は追葬時の土器とみられますが、個数や内容から見て複数回の追葬が考えられています。そして、庚寅銘大刀の副葬年代は、大刀の出土位置からみて最終追葬時のものとみられ、7世紀中頃であろうと考えています。（あくまでも、大刀の横にある、玄室内で最も新しい時期の須恵器が大刀に伴うものと仮定しての話ですが。）

石室の構造も、「大型の石材を使用している」「玄室の大きさが比較的大きめ」などの要素を持つことを踏まえると、6世紀末～7世紀初頭に北部九州で築造された石室と考えても全く無理はありません。〈中略〉

出土状況から見た庚寅銘大刀の製作年代も、「最終追葬とみられる7世紀半ば以前の時期」以上のことは言えない状況です。（これも、「最終追葬以後に大刀だけ玄室内に供えた」可能性もゼロではないのですが、これについては出土状態から得られる証拠が何もないのであくまでも可能性にとどまります。少なくとも、大刀が敷石上に直接間安置され、敷石との間に堆積層が見られないこと、敷石上面と11世紀後半代の面（中世に開口していたことが確認されています）の間に30cmの堆積層があり、層位の攪乱がないことから、大刀が置かれたのは7世紀半ば～7世紀末の時期幅に限定されそうです。）〈後略〉

以上のメールのやりとりからすると、571年、631年、691年（可能性はゼロではない）が「庚寅銘大刀」の製作年と範囲として良いように思います。

3. 文字の技術史（筆文字に似せて彫る文化と技術）

(1) 日本列島の線彫り刻銘技術

日本列島に文字の彫刻技術が入ってきたのは6世紀末のことです。中国、朝鮮半島を經由して金銅仏の製作技術と共にもたらされました。その技術は毛彫り刻銘技術と言って一回のたがねの動きで一本の文字線を彫ってしまう技術ですが、その元となった朝鮮半島です。朝鮮半島の毛彫り文様の初例は百濟金銅大香炉（567年以後）の毛彫り文様ですし、毛彫り刻銘としては王興寺金銅舍利銘（577年）を挙げることができます。朝鮮半島ではその後中国のさらい彫り刻銘技術の影響をすぐに受けて、毛彫り刻銘技術が発展的に成長することはありませんでした。ところが、日本列島では、導入当初は稚拙な毛彫り刻銘技術でしたが、それから200年足らずの間に見事なまでの水準に発展し、毛彫り刻銘技術は列島独自の技術となりました。その発展の過程を筆者は、第一期（導入期）、第二期（進化期）、第三期（完成期）の三期に分けて整理しました¹⁸。それらの実例をご紹介します。

第一期（導入期）：法隆寺甲寅銘釈迦光背銘（594年）、法隆寺辛亥年観音菩薩立像銘（591年・651

¹⁸ 鈴木勉 2013「毛彫り刻銘技術の進化論」『造像銘・墓誌・鐘銘 美しい文字を求めて 一金石文学入門Ⅱ技術篇』雄山閣、73頁

年)、野中寺弥勒菩薩像銘(666年)などに代表される銘文で、図14のように、文字は単調な直線が組み合わされています。概ね初期から670年前後までの時代です。



図14 第一期(導入期): 左から模式図、法隆寺甲寅銘釈迦光背銘(594年)、法隆寺辛亥年観音菩薩立像銘(591年・651年)、野中寺弥勒菩薩像銘(666年)

第二期(進化期): 船王後墓誌(668年)、小野毛人墓誌(677年)、長谷寺観音菩薩立像銘(702年)などが代表的な銘文で、図15のように筆文字の起筆(彫り始め)・収筆(彫り終わり)でたがねの方向を強引に変えて「墨だまり」や「筆を抜いた痕跡」を表現しようとしています。670年前後から8世紀初頭までの時代です。



図15 第二期(進化期) 左から模式図、船王後墓誌(668年)、小野毛人墓誌(677年)、長谷寺観音菩薩立像銘(702年)

第三期(完成期): 興福寺勸禅院鐘銘(727年)、山代忌寸墓誌(728年)、小治田安麻侶墓誌(729年)、石川年足墓誌(762年)などに代表される銘文で、図16の様に筆文字の線の肥瘦、抑揚、勢い、流れなどをたがねで表現できるようになります。8世紀初頭から後半にかかる時代です。



図16 第三期(完成期) 左から模式図、興福寺勸禅院鐘銘(727年)、山代忌寸墓誌(728年)、小治田安麻侶墓誌(729年)、石川年足墓誌(762年)



図 17 七支刀銘



図 18 昌寧校洞 11 号墳有銘円頭大刀

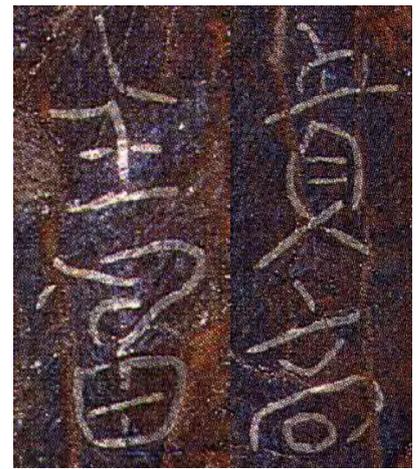


図 19 東博蔵有銘円頭大刀



図 20 武寧王陵銀製釧（部分、523 年ころ）



図 21 毛彫りの初例：陵山寺址出土百濟金銅大香炉(567 年以降)

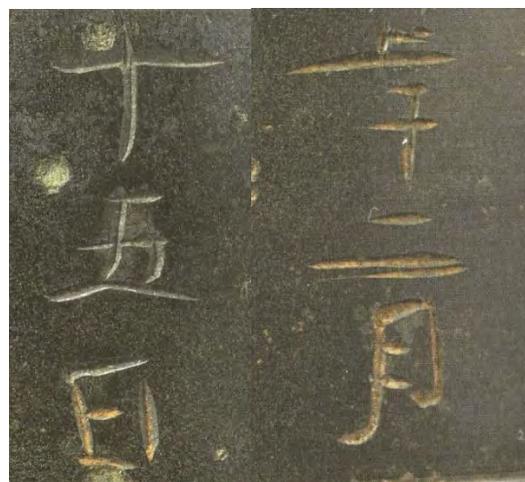
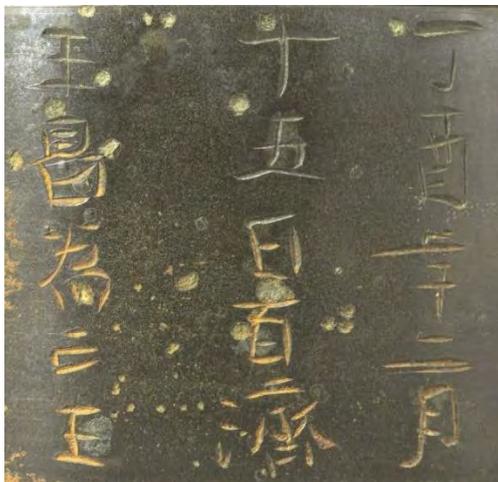


図 22 王興寺址 青銅製舍利函の毛彫り銘（577 年）

こうした刻銘技術の発展は、中国や朝鮮半島にも見られないものです。これを筆者は「流れの文化」と呼び、日本独自の発展の仕方だと考えています。

(2) 朝鮮半島の刻銘技術

百濟：七支刀(図 17)に始まり、5 世紀の象嵌銘(図 18, 19)へ、そして 6 世紀のなめくり打ち(図 20, 21)、6 世紀後半から 7 世紀前半の舍利函銘など(図 22, 23)へ

新羅：イサジ王銘大刀や刀銘に「なめくり引き」の技術

いずれも、筆文字に似せるレベルに達していません。それはすぐに中国からもたらされる「さらい彫り」刻銘技術にとって代わられるから独自の発展をしなかったのです。日本列島とは異なる発展の仕方

をします。



図 23 弥勒寺址金製舍利奉安記の毛彫り銘(639 年)

(3) 「庚寅銘大刀」の刻銘技術

ここで、「庚寅銘大刀」に戻ってよく観察してみましょう。「庚寅銘大刀」は荒い蹴り彫り象嵌技法で彫られていることが分かっています¹⁹ (図 24)。粗い蹴り彫り象嵌の起源は百済にあります。銘文では、先に詳しく述べた「中平銘鉄刀」の蹴り彫り象嵌があります²⁰ (図 25)。中平銘鉄刀は 3～5 世紀の間に日本列島で作られたと私は考えておりますから、この二振りの鉄刀と大刀は、細かく精緻な中国中原の蹴り彫り象嵌²¹ (図 26) とは大きな歴史的距離があります。歴史的距離とは時間的・空間的距離のことです。遠い極東アジアの日本列島で、300 年から 500 年後に製作されたと考えるに相応しい技術だと言えるでしょう。「庚寅銘大刀」の文字は筆文字によく似せて彫られていることが分かります²²。6 世紀の極東アジアにこれだけの水準の刻銘技術はありません。早くとも 670 年以降、遅ければ 720 年以降の日本列島でのみ刻銘可能な水準の文字なのです。ちなみに「庚寅銘大刀」に並ぶ水準のものとして東大寺金堂鎮壇具の陽剣と陰剣の象嵌銘 (図 27) を挙げるができます。こうした文字は、技術もさることながら、その技術を生み出す文化の力で生み出されます。ですから、私は、先に挙げた「庚寅銘大刀」の製作時期の候補、571 年、631 年、691 年のうち、691 年を第一候補として取り上げたいと考えます。

発掘担当者大塚氏の言を借りれば、7 世紀末年を挙げる共伴遺物はないとのこと。しかし、「庚寅銘大刀」は追葬された遺物の一番上に置かれていたことから、時代的な下限として 7 世紀後半まで視野に入れているそうです。従って私は、691 年の製作の可能性を第一候補としたいと思います。それは日本列島の文字の技術史の立場から考えてこれだけの象嵌文字 (図 28) を彫ることが、それ以前では難しいと考えるからです。第二候補として 631 年としますが、これは「文字の技術史」の立場からは受け入れがたい候補です。敢えて日本列島の技術の進化が筆者の想定より 30 年ほど早いとして、やむなく受け入れる場合です。

4. 「庚寅銘大刀」の解釈と製作年

筆者がお示しする釈文と訓読 (案) は以下の通りです。

¹⁹ 比佐陽一郎 2019 「第 2 章 現代に甦った庚寅銘大刀」『庚寅銘大刀 重要文化財指定品と遺跡の紹介図録』

²⁰ 鈴木勉 2008 「百練鉄刀の使命 東大寺山古墳出土中平銘鉄刀論」『論叢 文化財と技術 1 百練鉄刀とものづくり』

²¹ 鈴木勉・河内國平編著『復元七支刀 ー古代東アジアの鉄・象嵌・文字ー』雄山閣、巻頭図版参照

²² 比佐陽一郎 2019 「」『庚寅銘大刀 重要文化財指定品と遺跡の紹介図録』

〈釈文〉「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果凍」

〈訓読〉「大歳庚寅の正月六日。庚寅の日時に刀を作るに凡(すべ)て十二果(慥)凍。

〈解釈〉「大歳庚寅の正月六日。庚寅の日時に刀を作るに、すべて十二果凍(よく精製したはがね)を使
つて。」

また「庚寅銘大刀」の製作年は、第一候補として 691 年、第二候補として 631 年と推定します。

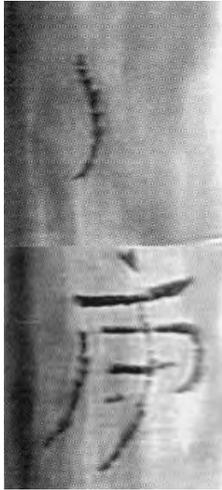


図 24 庚寅銘大刀の蹴り彫り象嵌 図 25 中平銘鉄刀の蹴り彫り象嵌 図 26 蒼山県永初六年銘大刀の蹴り彫り象嵌



図 27 東大寺金堂鎮壇具の陽劔と陰劔の象嵌銘

図 28 庚寅銘鉄刀「庚寅、作刀」

以上